

# 高齢社会をよくなる 女性の会会報

No.140 2002年11月発行

高齢社会をよくなる女性の会  
東京都新宿区新宿2-9-1  
第31高庭マンション802号室  
TEL.03-3356-3564  
FAX.03-3355-6427  
郵便振替 00100-0-79477



## — 目 次 —

第21回高齢社会をよくなる女性の会全国大会 … 1  
「安心・安全の地域創造」  
「ユニバーサルデザイン・ファッションフェア」開催 … 9  
9月例会・老いて女のひとり住まい 児玉桂子 … 11  
グループ便り・高齢社会をよくなる女性の会・大阪  
「介護保険制度見直しに対する意見書」を提出 … 14  
中国の高齢者事情見学の旅 … 14  
男・老いを語る ⑩高橋 進 … 15  
本の自己紹介、事務局だより … 16

## 第21回高齢社会をよくなる女性の会全国大会・熊本 安心・安全の地域創造 ～パートナーシップで今を生き未来を創る～

「安心・安全の地域

創造」をテーマに、第

二一回高齢社会をよ

くなる女性の会・全国大

会・熊本が二〇〇二年

九月七日・八日に熊本

県立劇場、熊本学園大

学を会場に開かれまし

た。二〇〇〇名を越え

る人々が集まって盛会

の内に無事終えること

が出来ました。

高齢社会をよくなる

女性の会の運営委員の

方々の助言と熊本会員

の意向とで構成してい

きました。

最も恵まれましたこ

とは、ご多忙なお二人

の女性知事にご出席い

ただいて、樋口代表が

コーディネーターで、  
「女性知事大いに語る」  
の講演を得ることが出

来たことでした。

そのあとのユニバーサルデザイン・ファッ

ションフェアも大会には珍しい催しもの

でした。当会理事の金森トシエさん、吉

沢久子さんにモデル出演をいただき、と

くにお願ひして飛び入りでモデルとして、

ご出演いただいた、潮谷熊本県知事・樋

口代表は注目の的でした。

今回の大会は二日目に五つの分科会を

持ちました。このことで出席者の出足を

心配致しましたが、殆ど初日と同数の人々

が、各分科会場に入場してくださいまし

た。各分科会とも盛んな討論がもたれ、

各コーディネーター、パネリストの方々

に感謝申し上げます。

今大会で得られた熱い思いを各地にお

持ち帰りいただき、これからの生きかた

に、繋げてくださいます事を願っていま

す。

この会が良い経過で送りましたことは、

三〇〇名を超えるボランティアの人々、

県・市の担当課の方々の熱心な協力のお

かげだと、深く感謝申し上げます。  
(熊本大会実行委員長 平野多嘉子)

# 女性知事大いに語る



堂本 潮穂 (千葉県知事)  
本谷 義恵 (熊本県知事)  
暁 子 (当会代表、東京家政大学教授)



樋口 二〇世紀のう

ちには無理であろう

と思っていた女性首

長、しかも県知事、

府知事さんが三人も

誕生されたことは大

変喜ばしいことであ

る。

人生一〇〇年を支

える時代を迎えて、

地域に密着した行政

を行うことが求めら

れている。より生活

の場に近いところに

いる女性が知事になっ

たときに、どんな可

能性があるのか、県

政にどんな変化が起

きるのか考えてみた

い。

堂本知事は就任し

て約一年半、潮谷知

事は就任して約二年

五カ月である。女性

知事としてどのような政策を進めている

のか、ご紹介したい。

堂本 一昨年の長野での全国大会に参加

した時には参議院議員であった。知事に

なり、国会議員時代に提案してもなかなか

か実現できなかったことを実現させるこ

とができています。

例えば、望まない妊娠、女性特有のが

んの早期発見・早期治療、更年期障害な

どの女性の健康問題に対する取り組みで

ある。

人生五〇年と言われていたのが、人生

八〇年となった。平均寿命が延びたにも

かわらず、その間の生き方づくりを支

援する施策が遅れている。そこで若い頃

から寿命を全うするまでの、生涯を通し

ての女性の健康づくりに取り組んでいる。

(女性は閉経によりホルモンバランス

が変化する。高コレステロール血症や骨

折をおこしやすくなる。若い頃から栄養

のバランスをとり、筋力維持のための運

動などの健康づくりをすることが大切で

ある。骨折すると、閉じこもり、寝たき

りになりやすい。片方の足を骨折した人

が、もう片方の足を骨折する確率も高い。

元気な高齢者になりたいと思ふたは、

をとる前に筋力アップの必要がある。)

県内の病院に女性専用外来を設けたが、

大変盛況である。また県内の全ての保健

所で、女性医師による「健康相談」を行っ

ている。開始してから一年で、あつとい

う間に受診者が増加した。これは女性知

事ならではの施策であることも確かでは

あるが、地域の女性たちに、潜在的なニ

ズがあったということである。

高齢者施策についてであるが、千葉県

では、全室個室、ユニットケアの特別養

護老人ホームができた。建物の周囲に堀

がない構造である。大食堂はなく、ユニッ

トごとに食事の用意をするなど新しいケ

アに挑戦している。

ユニットケアの全国セミナーも千葉県

で開催した。参加された他県の知事さん

と、共同提案「誰もが地域でその人らし

く暮らせる町づくり」を考え、厚生労働

省にも提出した。

高齢者は弱い存在ではない。楽しい存

在、生き生きとした存在である。私は高

高齢者文化を創っていききたいと考えている。潮谷 知事に当選したら、少子高齢社会という実態をふまえて県のあり方を考えていきたい、男女共同参画社会を良い形で実現していきたいと考えていた。

県政は未来社会の預かり物であるので、未来社会にマイナスを残すのではなく、付加価値をつけていきたいと考えている。創造にあふれ、命が脈打つ熊本を基本姿勢としている。キーワードはパートナーシップである。

視点としては人権と環境を大事にしていきたい。それを実践していくための理念として、ユニバーサルデザインを県の施策、基本理念としている。

(バリアフリーは、できてしまった心の障害や物の障壁を取り除くという、いわば事後対策である。事後対策ではなく、それを事前に盛り込む「ユニバーサルデザイン」を県の施策の基本理念とした。) 全てのの人に快適で安全であること、全ての人の状況に柔軟に対応できることが大切である。熊本ユニバーサルデザイン振興指針を定めている。具体的には、車

いすでも乗れる低床電車、子供たち、障害のある人にも使いやすいドアの取っ手などである。

県の運転免許センターでは、全国で初めて、母子で参加できる受講室を作った。IT講習会も、高齢者のためにはゆっくりとしたプログラムが用意されており、障害者の方のためには障害の部位別にプログラムが用意されている。

また現在、新しく建設される新幹線の駅舎に、全ての人が使いやすいようにユニバーサルデザインの導入を計画している。本日は皆さまにユニバーサルデザインについて広く知っていただくために、ユニバーサルデザインのファッションフェアを企画している。

地方分権一括法、介護保険法が始まった。これは大きな時代の変化である。

子育てや介護が、女性を中心に、特定の家族に集中している状態は否定できない。この状態を何とか解消したいと考え、子育てや介護負担から家族を解放していく施策を進めている。

県民のニーズが多様化していく中で、

NPO法人等に対して、在宅介護サービスに関する補助をすることになった。これを行っているのは全国で、千葉県と熊本県だけである。

(ほほえみライフサポート事業を開始した。子供が養護学校に通学している場合、従来親が一日中付き添ってケアすることが必要であった。親たちも社会に参画する時間を持つことが出来るように、県立の三つの養護学校に看護師を配置した。また、夏休みの障害児家族支援モデル事業も始めた。)

熊本は長寿県であり、高齢化率が高い。健康で長生きできるように、介護予防と健康づくりが必要である。個別健康教育事業、地域リハビリテーションの推進を他県に先駆けて取り組んでいる。

男女共同参画条例を策定し、農山村や漁村の男女共同参画に向けて、農業女性の起業家支援資金も創設した。

生涯を通じた女性の健康支援にも、これから取り組んでいきたいと考えている。

現在全国で女性知事は三人である。千葉県(C)、大阪府(O)、熊本県(K)

である。C O Kつまり、careはO Kということで、今後とも私たち三人トリオで頑張っていきたい。

**樋口** お二人のお話から、女性知事によって、今まで光が当たっていなかったところに光が当てられてきたことがよくわかった。今後も連携を深めながら、県政の力量アップを図っていただきたい。

**堂本** 熊本では男女共同参画に関する条例を策定されたとお聞きし、非常にうらやましい。私は国会議員の時に、男女共同参画社会基本法を成立させた。これは理念法であるため、各自治体で条例を制定する必要がある。今、千葉県だけではなく、日本中を不思議な風が吹いているような感じがする。それは、女性よ家庭に帰れという風である。

**樋口** 男女共同参画は国際的なルールである。男女の違いを認めた上で、一人一人の個性が十分に生かされるようにしていかねければならない。

長野県ではダムが大きな問題となった。両県とも土木・建設などの分野で抱えている問題があると思うが、また県議会と

の関係なども含めてどのように考えていらっしゃるのか。

**潮谷** 熊本県も川辺川ダムの問題がある。流域がダムは必要といっており、本体着工を目前にして、現在まで三六年の歴史がある。これに対しては、八代海の漁協が反対している。なぜダムが必要なのかきちんと話し合うことが必要であり、現在住民討論集会を開催している。環境問題について、流域の協議会を立ち上げてその中で検討していきたい。議会にはさまざまな意見があるが、住民と一緒に考えていく中で、情報公開、説明責任を果たしていきたい。

**堂本** 私自身は完全無党派で当選したのでしがらみはない。しかし、県議会も知事も県民の信託を受けたという点から考えると、知事としてやりたいことを通すには努力が必要である。

(日本が首都圏に一本しか滑走路をもてなければ、何かあった時に対処できない。成田には三〇年の歴史があることは確かであり、あくまでも空港公団、国も話し合いで解決する立場であるが、国益

としてはこのままでいいというわけではない。知事に男女という区別はなく、やらなくてはいけないことはやらなくてはいけない。)

三番瀬の問題は、白紙撤回を公約して知事になった。知事になってから、市民、環境保護団体、漁業者、市、県、国が参加する円卓会議を行っている。中止した後について、どのように三番瀬の干潟を保全し、自然を再生するのかなど議論を重ねている。はじめは対立が多かったが、今では非常に深い議論ができています。

**樋口** 女性知事が二人そろって語り合うと、すごく未来が明るく見えてくるようだ。

**潮谷** 今後、女性知事の県は変化しているという政策提言を、共通してやっていきたいと考えている。

「高齢社会をよくする女性の会」ということで、堂本知事にお越しいただいたことをきっかけとして、まず福祉というところから、ともに高齢社会に向けての施策を模索していきたいと考えている。

(浅川典子・記)

## 「介護は常に進化が必要」

中村 秀一（厚生労働省老健局長）

### 【開催にあたって】

高齢社会をよくする女性の会第二一回全国大会・熊本で開催おめでとうございます。私は一週間前の異動で老健局の新局長となったばかりですが、私と「高齢社会をよくする女性の会」とのつき合いは長く、ゴールドプラン作成時からのものです。

平成一二年介護保険制度スタート時には省内の政策課長であり、同年長野で開催された当会の全国大会にも参加いたしました。介護保険最前線から考えると題したシンポジウムでの介護保険の採点の際には、五点満点の四をつけました。

この一〇年の高齢者の福祉・介護についての歩みの中で、本会は介護保険制度の産みの親の一人という役割を果たしてきたと言えるかと思えます。これからどうか我が子のように介護保険制度を育てていただきたいと皆様にお願いたします。

### 【介護保険について】

第一号被保険者の数は、介護保険スタート時には、二一六五万人であったのが、二〇〇二年三月には二二一七万人と増加している。

六五歳以上人口に占める要介護認定を受けた人の割合も、スタート時の一％から一二・四％へと増加している。今後三年で要介護認定率は一四％位になるだろうと推定されている。

要介護認定率が上昇している中で、増加しているのは要支援と要介護一の人である。そのため、要介護認定率は上昇しているが、要介護度の平均は下がってきている状態である。

介護サービスを利用している人の数は、二〇〇〇年四月には在宅九七万人、施設五二万人であった。二〇〇二年三月には在宅一六八万人、施設六八万人とそれぞれ増加している。

介護給付費の支払いも増加している。スタートしてから二年半過ぎた介護保険は一五年度から第二期事業計画期間に入るが、現在一五年度から三年間の事業

計画、保険料の検討、介護報酬の見直しなどが進行中である。

現在の全国平均保険料は約二九〇〇円であるが、六月の中間まとめの結果では一五年度からは三二〇〇～三三〇〇円位になるだろうと予想されている。

国の事業の中で最も地方自治が進んでいるのが介護保険制度である。住民を交えて具体的に議論した上で、給付と負担を決めて欲しい。

私が老人福祉課長だった一二年前、平成二年頃は、ホームヘルパーは全員公務員でなければならないという議論が多かった。二四時間ホームヘルプサービス、グループホームなどは日本に全くなかった。今は、新型特別養護老人ホームは全室個室・ユニットケアと言われている。介護は常に進化が必要である。安住することなく、高齢化による課題に立ち向かうことが必要である。

もちろん高齢者の生活を支えるためには介護保険のみでは十分ではなく、市町村による住民サービスや、地域での支え合いの仕組みが必要となる。（浅川典子・記）

## 第一分科会

# 女性が拓く農山漁村

## の未来

コーディネーター  
篠崎 正美(熊本学園大学社会福祉学部教授)

パネリスト  
井上 由美子(九州保健福祉大学専任講師・当会運営委員)  
藤原 ゆかり(鹿児島オフィスヒュア代表)  
田原 房子(日本女性学習財団理事長・当会理事)  
川辺 正宜(農事組合法人日進温室組合組合長)  
西川 千壽子(玉名市農業委員)

篠崎 農山漁村の高齢化は都市部を五〇年先取りしており、大きな問題である。少子高齢社会を快適で安全で安心な社会にするには先ず農村が変わらなくてはならない。この点をふまえての討議を。

西川 みかん専業農家の経営主で地域の女性と共に農産物直売所もやっている。夫、子供五人、母の八人家族で協力して生活している。男女共同参画は家族の応援が必須。

田辺 女性の元気が必要な時代だ。元気な女性にエールを、女性達よ女性の足を引張るのはよそう。研修会では異業種交流をして部外者との関係を結び、生産者と消費者がお互いを知り農業をする時代だ。

藤原 土に近い所にいる農業者は健康でおいしい物が食べられて幸せだ。女性農業者の労働を経済活動として正当に評価

することは農業の発展の要点だ。女性が公の場の主流に、農業の核に近いところに出ていく事が大事。

井上 日本社会は如何に都会中心であるかと延岡に来て衝撃を受けた。農山村には地域の人のつながりがある等の良さがあり、制度的にも地域性が重視されるべ

## 第二分科会

# 女性からの発信・水俣が目指すもの

コーディネーター  
松村 満美子(ジャーナリスト・当会理事)  
パネリスト  
郷田 美紀子(宮崎県綾の自然と文化を考える会代表)  
高見澤 たか子(ノンフィクション作家・当会理事)  
沼田 悦子(水俣市ゴミ減量女性連絡会議メンバー)  
吉井 恵璃子(作家・農林業家)  
吉本 哲郎(水俣市農林水産課長)

松村 地名(水俣)があがっているのは、この分科会だけ。熊本の熱い思いを伝えるもの。水俣は大変な思いの中から環境都市として再生しつつある。その活動を。

沼田 甚大な公害発生地の再生をかけて環境問題に取り組んでいる。水俣市は一六女性団体と「ゴミ減量女性連絡会議」

き。女性の実態を中央に届ける仕組みが欲しい。

たもつ 鹿児島島の男女共同参画推進の取り組みは、農業女性から始まった。農業政策は農業女性の役割を固定させず、生産者と位置づけ、その労働をきちんと評価するべき。そのことが産業における地位を高めることになる。

まとめ 農業は老いても健やかに働ける高齢者にも向いた仕事だ。これを農業への大きな明るいメッセージとして広げたい。(吉本元美/田上かつ子・記)

を結成。生ゴミ減量策として食品トレー廃止、買物袋利用、エコショップ認定制度を作った。子供への環境教育にも取り組んでいる。

吉井 山村では生活が自然の中にある。人間がやり過ぎれば、必ずしつぽ返しがかかることを経験的に知っている。「バチ

カブル」という思いが環境問題を解決する。もやい通貨を導入しサービス交換、労働力のやりとりをしている。手を汚す事も厭わぬ暮らしを！

吉本 水俣病問題で四〇年近く水俣は苦しんだ。行政が正面から向き合い環境都市を目指している。「水とゴミと食べ物」の安全を求め国に頼らず市民の手で。ゴミの分別は資源となり価値を生み、語り部活動や元気村の取り組みは他県からの見学、視察訪問を招いている。

郷田 綾町は八割が山(九〇%は国有)。四〇年前国有林伐採を村長が阻止、山を守る自然農業を進めた。人作りを大事に自治公民館制度を設ける。照葉樹林日本一の景観は観光客が訪れる。本物は自然を汚さない。出来る事をしながら、やさしい生き方をしようと思う。

高見澤 地方へ行くと必ず地方紙を読む。大都市の発想で考えず、地方から学ぶべき。ゴミの多さに支配される生活は変。便利さにおぼれている。都会の他人への無関心は生活の荒廃をもたらしている。

(西浦玲子・記)

### 第三分科会

## 私が決める終のすみか

### すみか

コーディネーター  
袖井 孝 子(お茶の水女子大学生生活科学部教授・当会理事)

パネリスト  
本間 郁 子(特養ホームをよくする市民の会代表・当会運営委員)

吉澤 久 子(生活評論家・当会理事)

林 佳 子(熊本県老人福祉施設協議会会長)

小森 佳 子(バリアフリーデザイン研究会事務局長)

白石 邦 子(NPO法人ワークシヨップ「いふ」理事長)

袖井 住まいは主要な要素なのに従来福祉においてあまり取り上げられなかった。介護保険はソフト面のサービス中心に進められた。が、ハード面の住まいや街のたたずまいがバリアフリーである事、施設に対する偏見等の心のバリアフリーも重要。この辺を皆さんと検討したい。

吉沢 六五歳から一人暮らしをしている八四歳の意見として、六〇代迄に自分はどう生きるのか人生の形を考えておくべきだと思う。住みなれた身丈にあった家がよい。人に頼んでも思い通りにはならぬから、家事も積極的にやり、健康第一の生活を旨としたい。本当の自分としての自由とは何かを考えよう。

小林 心のバリアフリーについて、措置時代から介護保険時代に移り少しづつ施設への見方が変化した。在宅、施設どちらも各人のライフステージ、価値観の違

いで必要な内容は異なる。老後の生活はそれ迄の人生で決まる。

本間 特養に関する相談事業、関係者の本音の受け皿の役をして、それを社会に反映し、失うものが大きすぎる特養カルチャーを変えたい。情報開示を求めて活動している特養待期者が多い理由は、そこに、人生終期の安心があるからだ。

白木 日本社会の高齢者の住宅問題の根本は持ち家比率(六割)が高いということ。街の施設、交通手段など暮らし全般について大事なことは沢山あるが先ず居住性の高い良質の公営住宅、借家を増す努力が必要。

星子 “その日のために”と施設の調査をした。ボランティアとして関わる時の眼と調査で見えたもの、利用者の立場ではその評価が大きく違うことが解った。

(西上葉子/山井照子・記)



れには情報の公開が必要だ。

西川 地方選挙は後援会の選挙だといわれるが、国政レベルでは組織を持たなければまず当選しない。それが女性となると更に厳しい。

三隅 私は国際婦人年と共に歩き出し、北九州市からそれに熱心な人と認められて、市民とのパイプ役として行政に関わり、以来二〇年伝達された情報を自分のものとして、行動していく多くの女性と共に活動している。

金森 少し視点を变えて、家庭・家族の問題から見ると、今言われている家庭崩壊は崩壊ではなく、家族数減少の結果であり、核家族・老夫婦家族・一人暮らしが増え、三世代同居が非常に減った。そこに老人や子供に関する事件の原因が生じてくる。そういう所には様々な社会的支援が必要で、そのためにも政策決定の場に女性が必要だ。

「介護は社会で。家庭は愛で。男女共同参画で。」

(江副ますみ／渡辺紘子・記)

## 「ユニバーサルデザイン・ファッションフェア」開催

いま、熊本県では、ユニバーサルデザイン(UD)の理念を柱に据え、「だれもが暮らしやすく豊かなくまもと」づくりに取り組んでいます。

九月七日に開催された「ユニバーサルデザイン・ファッションフェア」は、ユニバーサルデザインの考えを身近なファッションに取り入れ、具体的な形でご来場いただいた皆さんにお示しすることにより、ユニバーサルデザインへの理解を深めてもらうことを目的として開催。

フェアでは、県内服飾専門学校生が「UDファッション」をテーマとして描いたデザイン画を基に制作した衣服二〇点、今年五月に開催された「東京新人クリエイターズコレクション二〇〇二」入賞作品四点、服飾メーカー既製服六点をファッションショー形式で披露しました。また、ボランティアモデルの皆さんや、ヘア・メイクにご協力いただいた美容専門学校生などたくさんの方々とのパートナーシップにより実現したものです。

ショーでは、「UDファッション」を観客の皆様を理解していただくために、生徒達が苦勞しながら様々な工夫を凝らしている様子や衣服のUDのポイント等を大型スクリーンで紹介しました。

また、特別ゲストとして樋口代表と潮谷県知事に最後にご出演いただき、盛会のうちに「ユニバーサルデザイン・ファッションフェア」を終了することができ、このような機会をあたえていただきました。「高齢社会をよくする女性の会」の皆様、並びにボランティアとしてこのフェアの開催にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げます。

(ユニバーサルデザイン・ファッションフェア  
実行委員会事務局 上原真二・記)



プロ顔負けの金森トシエさん

熊本学園大学が会場となった第四・五分科会場から楠の青葉の木陰を歩いて五分。閉会セレモニーは樋口代表、平野大会実行委員長の挨拶のあと、熊本の「熱い心のバトン」が両県の実行委員長の固い握手で次回開催地「福島」へ渡されました。

樋口代表、沖藤典子さん、富安兆子さんは、この大会の成果を日本全国だけでなく国際社会へ発信したいと慌ただしく中国へ向けて出発され、会場では、「手のひらを太陽に」のかえ歌を全員起立で大合唱。

木村大会実行副委員長の閉会のことばで大会の全てを終了しました。

コンサートホール前のささやかな出店では、熊本県特産品を買い求める人や、来年の再会を楽しみにと、人の流れはゆっくりと行きつもどりつ、いつまでも続きました。

(田中昌子・記)



熊本から福島へのバトンタッチ！



飛び入りモデルの潮谷知事と樋口さん



万雷の拍手の中で、吉沢久子さん

## 老いて女のひとり住まい

講師・児玉桂子 (日本社会事業大学教授)

司会・袖井孝子 (当会理事)

日本では、伝統的な高齢者像や高齢者の居住イメージが強く、住宅政策は伝統的家族(夫婦と子ども)を支援してきた。しかし、今後は高齢社会の在り方を決める団塊世代の、とくに女性の意向に注目する必要がある。

高齢者に関する居住のイメージは次のようなものである。

- ① 国民は住宅の所有を望み、したがって高齢者の持家率は高い。
- ② 高齢者は住み慣れた家に、家族と住み続けることを望んでいる。

- ③ 伝統的家族(夫婦と子ども)を支援することが、公共的住宅機関の主な役割である。

- ④ 住宅の計画や取得は男性の仕事であ

る。

団塊世代で常用雇用の男女を対象とする二回の調査を中心に報告する。調査は、連合および厚生省の協力を得て、生涯居住環境研究会(代表 児玉桂子)が実施した。

**調査1** 首都圏に職場のある常用雇用の三五歳以上の女性を対象に一九九三年に調査。分析対象は二二三七名。

**調査2** 東京に職場がある四〇歳以上の单身と夫婦世帯の男女を対象に九六年に調査。分析対象は五三四名。

### 一、調査対象者の特徴

調査1の対象者の平均年齢は四四・二歳。六割は既婚で、三分の一近くが未婚。

未婚者の約半数が単身で住み、残りは親と同居である。未婚単身者の年収は五百万円以上が六割近くを占め、働く女性の平均を上回る。住宅の所有状況は、調査対象者全体では七四%だが、未婚単身者の四七%が民間賃貸住宅に住んでいる。単身者の住宅面積は三〇平米未満が五割を超えている。年齢が増すにしがたい、賃貸契約の更新が困難になることが懸念され、定年後の住宅に強い不安を持っている。

調査2の対象は、男性二六二名(単身世帯四五%、夫婦世帯五五%)、女性一三一名(単身世帯五三%、夫婦世帯四七%)。調査対象者の平均年齢は、男性が四五・九歳、女性が四八・七歳、平均年収は、男性が七六五万円、女性が六四四万円。日本の女性の給与は、平均して男性の六割であるが、調査対象者では男女の格差が少ない。

持家率は全体では五六%。单身男性の二割が住居費の安い独身寮など給与住宅に住んでおり、日本では男性のほうが住宅に関する企業福利の恩恵を受ける機会



調査結果を元に話される児玉桂子先生

が多いことを反映している。

## 二、住宅所有意識の変化（調査2）

「多少の無理をしても住宅を持つほうがよい」は全体では四七%。「生活の無理をしてまで住宅を持つことはない」は五二%で、男女の差はみられない。住宅取得派の主な理由として、女性は「資産価値」よりも、老後家賃の心配がなくなることをあげる者が多い。首都圏に住む單身女性にとっては、住宅の所有価値よりも利用価値が重要である。したがって、住宅を所有するための支援よりも、身体的経済的に自立して住み続けるための支援が必要である。

## 三、定住意識の変化（調査2）

定年直後に「転居したい」と「転居せざるを得ない」を合わせた転居派は、男女合わせて四四%だが、とくに單身男性では六〇%にのぼる。これは、現在給与住宅に住む者が多いことによる。転居先として、女性は「利便性」を求め、男性は「自然環境」を重視し、「郷里」をあげ

る者が多い。

定年後の生活の中心として、趣味・スポーツを選択する者は女性よりも男性に

多く、ボランティア・社会活動や学習・教養を選択する者は男性よりも女性に多い。ケアが必要になったときの暮らし方では、全体の四二%が高齢者専用施設への転居を、三九%が自宅で在宅サービス利用を選択している。高齢者専用施設への転居意向は、男性よりも女性のほうが高い。

## 四、共生観の変化（調査1）

「血縁関係はないけれど共通のなにかがある人達が集まった住まい方（施設ではない）」に関心のある者は、女性全体では三九%、單身女性では五五%。生活の共同性と独立性がどの程度確保された住まいが好まれるかをみると、「住戸は完全に独立して、共用スペースがあること」が、全体でも、未婚者でも六割を越える。定年後に大切にしたい付き合いとして、調査対象者が第一にあげたのは、仕事以外の趣味の仲間であり、次に定年以前か



司会の袖井さん

らの仕事仲間、家族・親族と続く。この順序には世帯形態による差はみられない。現在の高齢者の場合には、老後大切な人間関係として家族を第一にあげ、家族への依存性が高いが、団塊世代の女性は血縁に依存しない高齢期の人間関係を重視する傾向が認められる。

しかし、男性の場合には、「仲間と住む」居住形態への関心は低く、現在の高齢者層も団塊世代も家族と住むことを強く望んでいる。日本では、住宅は血縁のある家族と住むものという考え方が支配的であるが、今後「仲間と住む」という住み方も住宅政策に取り上げることが必要である。

## 五、結論と提案

大都市で常用雇用にある団塊世代への調査から、これまでの日本における高齢者像や高齢者の居住ニーズとは異なる新

たなニーズが明らかにされた。高齢期の住まいのニーズには、男女による差異が顕著である。大都市で働く单身女性は、とくに定年後の生活や住まいに強い不安を持ち、その解決策を真剣に考えている。今後の高齢社会を左右する団塊世代の、とくに女性の意向を住宅政策に反映させることが必要である。調査の結果を踏まえ、長寿時代の住まいの選択肢の拡大に向けて、次のような提言をしたい。

### ① 住宅の「所有」から「利用」へ

生涯居住環境研究会では、首都圏に住む常用雇用の单身女性三五歳から八六歳の生涯収入と支出のシミュレーションを、住宅取得と賃貸住宅の二つのケースについて行った。いずれの場合も、社会保障費を除外した生涯収入の約四割以上を住居費が占め、とくに住宅取得の場合には八六歳時点で貯蓄がマイナスに転ずる。

利用権方式や家賃前払い方式、あるいは家賃補助や良好な賃貸住宅の建て主への補助など新たな住宅システムの開発が求められる。

### ② 血縁に基づかない共同居住への支援

これまでの公的住宅は、家族向けであり、单身向けは非常に少ない。今回の調査で示されたように、老後は仲間と助け合いながら暮らしたいという要望が団塊世代の女性には強い。このような自立指向の強い、相互援助による共同居住に対する公的制度の拡大や新たな支援策が望まれる。

### ③ 高齢期の住まいに関する総合情報の提供

自立した生活を維持するためには、三五歳から生涯居住設計を描くことを提案したい。そのためには、情報が不可欠だが、現在の日本では、情報の提供が圧倒的に遅れている。変化の激しい社会の中で、各自のライフスタイルを大切にして、自立生活を維持するためには、若年から高齢期までを対象とした暮らしと住まいの総合情報の提供が必要である。

男性中心の日本の住宅政策を変えるには、「高齢社会をよくする女性の会」が厚生労働省や国土交通省に対して、積極的に働きかけていくことを期待したい。

(袖井孝子・記)

## 高齢社会をよくする女性の会・大阪

### 「介護保険制度見直しに対する意見書」を提出

坂口厚生労働大臣に面会、意見書を手渡し、提言してきました

私たちの会では「介護保険制度」に大きな期待を抱き、平成一二年四月実施のとき、介護の社会化の第一歩として評価しました。

不備を覚悟して実施された介護保険制度です。利用者側、実施する行政側としてもシステムへの不慣れ、当面の供給主体である事業者側の制度理解度の高低：などが大きく浮かび上がってきました。

これらを一年数ヶ月かけて検討し、できるだけ短く、しかも私たち草の根の市民の思いを伝えるものとして意見書にまとめることができました。

今回、坂口大臣に直接、要望を届けることができたのは僥倖というよりはなく、関係して下さった方々に感謝の他ありません。私たちの長い努力の第一歩は実りました。しかし、大きなテーマ「介護の



「介護の社会化」と、住みやすい高齢社会の実現はこれからです。今後とも明るい二一世紀を目指して皆さんとともに歩みたいと思っております。

※意見書内容をお知りになりたい方は、大阪の会事務局へ直接お申し込みください。FAX ○七二七―五三一―九二二四

## 行つてきました 中国の高齢者事情見学の旅

日中国交正常化三〇

9月9日人民大会堂での式典、三木睦子さんの姿も。中央・樋口さん



周年、中日女性友好交流会に、熊本大会を終えて直接かけつけました。このほど党総書記に選ばれた胡錦濤氏と握手してきました。その後、北京と上海の高

齢者福祉事情を三日ほど見学、メンバーは樋口恵子（代表）、沖藤典

子（理事）、富安兆子（北九州女性の会代表）の三人です。これから順次会報でリリースのご報告します。ホームページにも掲載予定。どうぞご期待下さい。（樋口・記）



左から校長先生、沖藤典子、富安兆子、樋口恵子さん



## 「社会人としての目覚め」

たか はし すすむ  
高 橋 進  
(日本総合研究所調査部長)

1953年東京都生まれ。一橋大学経済学部卒業。住友銀行（現三井住友銀行）入行、調査部門を経て、90年より日本総研に出向。96年より現職。テレビ東京「ワールド・ビジネス・サテライト」、読売テレビ「ウェークアップ」などにレギュラー出演。

これでも私はエコノミストとして、家の外で日本の構造改革や社会の変革について論ずる機会が多い。妻はそんな私の話の自身はあまり理解していない（と思っていた）。一方で私は家事に疎い。夫は仕事、妻は家事の典型である。

少し前のこと、そんなわが家に小さな事件が起きた。きっかけは東京都がごみの分別収集を始めたことである。たまたま町内会のごみ当番であった妻は、そこで思わぬ苦勞をした。分別されなくて出されたごみを収集車は持っていつてくれない。残されたごみを前に当番は呆然とする。区役所や警察に相談しても事態は解決しない。そこで、ごみ袋の中から領収書などを手掛かりに無分別犯を突きとめ、ねじ込みに行く。でも犯人は、分別収集などにお構い無しの独り暮らしの若者や事情に疎い外国人であったり、管理者不在のアパートの住人であったり、一筋縄ではいかない。妻はそうした人達をひとりずつ説得して回り、終には分別収集を軌道に乗せた。

私達夫婦はこの些細な事件を通して、都会人の無関心さに愕然としつつも、行政頼みには限界があること、都会にこそコミュニティを再生させなければいけないこと、そのためには自らが行動を起こすべきことを再認識した。

問題は、この事件の解決に夫がまったく役に立たなかったことである。仕事で忙しいと逃げ腰の夫に対して、妻の冷やかな目は「自分の回りの社会も変えることもできないようでは、家の外で社会変革を語る資格はないわね」と語っていた。夫としては、汗顔のいたり、いや反省しきりである。

構造改革はお上の改革であるが、一市民もボランティアやNPO活動を通じて、あるいは身近なことを通じて、コミュニティ再生や社会変革に貢献できる。そうした貢献が自己変革のプロセスでもあると思うようになったのは、年を取ること、でようやく私にも社会人としての自覚が芽生えてきたからであろうか。

「痴呆の人にケアが活きる場所  
グループホームケア」

中島紀恵子編著

(日本看護協会出版会 一三二〇〇円＋税)

本書は、日々グループホーム作りに汗を流し知恵をしばってきた二人と、「グループホームケア」を意味づけ検証したがっていた二人の三年間の協働による「地物産」といえる本です。

この本では、グループホームの「器」そのものの中に、ケアの原型が圧縮されていることを明らかにしたいと思えました。より正確には、グループホームという「器」が旧来型の施設よりもよいかからケアもよはずという「神話」を取り除いてほしいと願っています。

グループホームは、ケアと環境の各々が各々の部分となって作用しあい、それを始動させる中心に痴呆の人がいて、それを認識することのできる働き人もいてケアは混じり合う場所です。こうした日々が営まれているから、グループホームケアというのです。したがってこの本の中味は、家庭、施設を問わずケアに関心をもつ人であれば、役に立つことがいっぱいあると思います。

「夢を食む女たち 新生メデイカル・  
福祉ビジネス実践論」

石原美智子編著

(中央法規出版刊 二五〇〇円＋税)

記録映画「安心して老いるために」の舞台になった、サンビレッジ新生苑の理事長が株式会社で訪問介護事業を展開していく実践記録。

福祉の理念を最優先しながら企業を興し、一見矛盾するかに思われる経済活動の実態を通して、あるいはまちづくりを通して少子高齢社会にあるべき姿を模索している女性集団の活動の記録である。

第一章では福祉ビジネスを展開するための考え方について、第二章ではその考え方を基本にした一企業の成長の姿をありのままに、第三章は日本の多くの忘れ去られがちな過疎地での訪問介護の可能性を探った提言、第四章は地域を面とらえた取り組みの一端を、最後の第五章は新生メデイカルが参考としているオーストラリアの福祉ビジネスを紹介している。介護保険を賢く活用し、福祉ビジネスの正しい成長を促すことが日本の今後にとって必要である時、福祉ビジネスの適正規模を考えていくきっかけになる一冊である。

事務局だより

皆様お変わりございませんか。

- 熊本大会の報告は紙面の都合で概要的になってしまいました。富山大会と同じく詳細の記録集にまとめて皆様にお届けしたいと思っておりますのであしからず。
- 今年度の会費が未納の方には再請求の振込用紙を同封いたしました。入れ違いにご送金の方にはお詫び申し上げます。
- 不明な点がありましたら事務局まで。
- おまたせしました。歳末恒例・女たちの討ち入りシンポ十二月十四日(土)のご案内をお送りいたします。豪華な顔ぶれで楽しくタメになる舞台をお見せしますので乞うご期待！ 今すぐお申し込みを！
- 新春例会は一月二十日(月)チラシご参照の上お申し込みください。
- おでかけください。オーブンハウスは一月二十七日(月)十一時～四時迄です。
- 年末・年始休業——事務局は十二月二十七日(金)まで、新春は八日(水)から平常通りとさせていただきます。全国の会員の皆様どうぞよいお年を。

(長井照子)